

日本語の会話ジョークにおけるリスナーシップ¹

難波 彩子

岡山大学言語教育センター

〒700-8530 岡山市北区津島中 2-1-1

E-mail: anamba@okayama-u.ac.jp

あらまし 一般的に日本人は公共の場であまりジョークを交えた発言や会話をする事が少ないと言われることが多い。しかしながら、親しい間柄での会話などでジョークのやりとりを積極的に行うことが報告されており (Takekuro, 2006; Oshima, 2013), 実際に日本人がジョークのやりとりを行わない訳ではない。一方で、会話ジョーク (Boxer and Cortés-Conde, 1997) が実際の自然会話の中でどのように起こり、会話の共同構築に向けた聞き手の貢献, 「リスナーシップ」と関わり、そして会話参加者同士の関係を深めていくことにつながるのかについて、より詳細な調査を行う必要がある。こうした背景にもとづいて、本稿では親しい間柄の会話として家族会話に焦点を置きながら、家族会話における会話ジョークでのリスナーシップの役割を検討し、会話ジョークとリスナーシップの関係性、そしてそれらと家族関係とのつながりに結びつくような機能について考察する。最後に、分析結果を踏まえながら、会話ジョークに関わる英語教育への示唆を行う。

キーワード 会話ジョーク, リスナーシップ, 日本語インタラクション, 家族関係, 笑い

Listenership in Japanese conversational jokes

Ayako NAMBA

Language Education Center, Okayama University

2-1-1, Tsushima Naka, Kita-ku, Okayama City, 700-8530 Japan

E-mail: anamba@okayama-u.ac.jp

Abstract There have been enigmatic views about whether Japanese people really exchange jokes in their interaction, as it is said that they rarely use them in public situations. However, they do exchange jokes in in-group relationships as a previous study on discourse analysis revealed (Takekuro, 2006). On the other hand, there is still room to examine more details on exactly how ‘conversational jokes’ (Boxer and Cortés-Conde, 1997) occur in Japanese real interaction, relate to listenership, and lead to corroborate in-group relationships. This paper aims to explore the role of listenership in conversational jokes by focusing on interactions between in-group members such as family members. I will examine a relationship between conversational jokes and listenership, and the communicative functions to build family relationships. I will lastly touch upon some implications on how the findings could be applied to English-language education.

Keyword conversational jokes, listenership, Japanese interaction, family relationship, laughter

¹ 本研究は、2012年度より科学研究費補助金研究活動スタート支援: 課題番号 24820029 『通文化的語用論におけるリスナーシップの研究』の助成を受けている。

1. はじめに

日本人は公共の場でジョークのやりとりを行うことが英語話者に比べて少ないと指摘される。それでは、日本人はジョークやユーモアを交えたやりとりを行うことは本当に少ないのだろうか。そしてユーモアに対する理解はあまりみられないのだろうか。このような疑問に対して、特に談話分析に関する先行研究では(Takekuro, 2006; Oshima, 2013), 日本人が親しい間柄では積極的にジョークやユーモアを交えたやりとりを行うことを報告している。一方で、日本語の自然会話を扱った会話ジョークに関する実証的な分析と、さらに会話参加者同士の関係性、特に会話の共同構築に向けた聞き手の貢献、「リスナーシップ」に焦点を当てた研究はまだあまりなされていない。本稿では、このような背景から、親しい間柄の会話に着目し、収集した9家族の会話データのうち、3家族の会話を分析対象として、会話ジョークとリスナーシップの関係性、そしてそれらと家族関係とのつながりに結びつくような機能について考察する。最後に、分析結果を踏まえながら、会話ジョークに関わる英語教育への示唆を行う。

2. リスナーシップ

近年の談話研究では、スピーチ・アクトなど話し手主体の研究から徐々に会話における聞き手行動の詳細に関する研究も着目されるようになってきた(Goffman, 1981; Gardner, 2001; Tannen, 1989)。Tannen (1989: 100)が「聞き手による話し手の話を聞いたり、その相手を理解する活動は、受動的ではなく能動的であるため対話的な行為である。」と述べているように、聞き手がどのように実際に会話の中で大きな役割を果たしているのかについて、特に積極的な聞き手の反応が見られるような言語的な特徴(例えば、相づちや繰り返しなど)に注目した研究などがなされている(Tannen, 1989)。Goffman (1981)によると、聞き手は、(1) 立ち聞きする人、(2) 是認されているが話し手からは注意を向けられない人、(3) 是認もされ、注意も向けられている人の3種類から成り立つという。本研究では食事中での家族の会話を検討するため、食事に参加している家族メンバーは是認もされ、注意も向けられていると考えられる。従って本研究で対象とする聞き手は3番目のタイプになる。これらの視点にもとづいて、本稿ではリスナーシップを、「会話の相互産出の中で見出される、話し手により承認され、注意を向けられた、言葉を発してはいないが、会話に参加している者の貢献」(Namba, 2011)と定義する。

3. 笑い

聞き手の応答形式は、言葉を伴うもの(verbal feature)と伴わないもの(non-verbal feature)など様々な形式によってなされる。会話における聞き手の応答形式としては、“Mm hm”など、話し手が話題を展開していくのを受け身的に受け止め、その相手に発話を続けることを促すようなサイン(continuer)、“Mm,” “Yeah,”など、話し手の発言を了承するサイン(acknowledgement)をはじめとする言葉を伴う応答形式やうなずきなどの非言語形式によるものも含まれる。

さらに、この言語と非言語は3種類に細分化することが可能である。Laver and Hutchenson (1972)では、言葉を伴うもの(verbal)と伴わないもの(non-verbal)と、有声(vocal)と無声(non-vocal)によるものの区別を取り入れながら、有声で言葉を伴うもの(vocal/verbal feature)、無声で言葉を伴わないもの(non-vocal/non-verbal feature)、有声で言葉を伴わないもの(vocal/non-verbal feature)、の3種類の特性を提示している。例えば、有声で言葉を伴うものには、上記で触れたような、話し手に話題を継続するように促すサイン(continuer)や話し手の発言を了承するサイン(acknowledgement)が含まれる。また、無声で言葉を伴わないもの(non-vocal/non-verbal feature)には、うなずきやスマイル、ジェスチャーなどが該当する。本稿で扱う笑いは、有声ではあるが言葉は伴わないもの(vocal/non-verbal feature)として捉えられる。

次に、インタラクションにおけるリスナーシップと笑いの関連性を見いだすために、会話の中で笑いほどのように構造化されているのかを話し手と聞き手との間のやりとりを通して詳細にみる事が可能である。その基本構造として、Jefferson (1979)は、話し手の笑いにもとづいて、他の会話参加者による笑いが生じるシークエンス(会話の流れ)に注目し、特に話し手によるこのような行為を誘い(invitation)と名付けている。ただし、この誘いは、笑いを伴う場合と伴わない場合の両方がある(Glenn, 2003)。笑いを伴わない場合、話し手の発話内に可笑しさ(laughable)が含まれ、その要素に対して聞き手が笑う場合がある。このような場合も聞き手の笑いにつながる誘いとして考えられる。従って可笑しさと笑いの両方、またはどちらかによって話し手の誘いは行われることになる(Glenn, 2003: 54)。可笑しさはあらかじめ会話の中で必然的に見られるものではなく、むしろ笑いを通して会話参加者のやりとりの中で交渉され、創造されていく特質があると言える。一方、このような話し手の誘いに対して、聞き手が笑って応じる場合は、聞き手の受諾(acceptance)として捉えられる(Jefferson, 1979)。聞き手の受諾笑いが成立するには、聞き手の笑いは直前

の話し手のターンにあまり遅れず起こることが主な条件となり、話し手のターンの後にしばらくポーズが生じるような時は、聞き手の応答は遅れたものと捉えられ、双方のやりとりに何らかのコミュニケーション上の問題が起きているというシグナルになる。さらに、聞き手は常に話し手の誘いに対して受諾笑いとして応じるわけではなく、笑いでは応じないような断り (declination) が見られることもある。この断りが成立するためには、話し手の直前のターンからポーズなどを伴って遅れたり、聞き手の言いよどみが見られたりすることによって、会話の流れにギャップが起こることが目安となる。

4. 会話ジョーク

日本人のコミュニケーションについて触れられる場合、日本人はユーモアのセンスがないと頻繁に指摘される。それでは日本人はユーモアのある会話やジョークを交わしたりすることはないのだろうか。このような問いに対して、日本語を扱った談話分析の先行研究では (Takekuro, 2006; Oshima, 2013), 日本人と欧米人におけるユーモアやジョークの捉え方の違いに注目をしながら明らかにしている。

Takekuro (2006)では、日英語のドラマでみられる「会話ジョーク」²を収集し、英語では家族や友人など親しい間柄だけではなく、疎遠な関係同士でも会話ジョークのやりとりが行われるのに対して、日本語では主に親しい間柄で交わされることが報告されている。この日本語インタラクションにおける親疎関係については、家族や友人関係など比較的親しい間柄は「ウチ」、会社の同僚や近所の人、仕事上でつきあいのある人などは「ソト」、その他あまり接触のない人は「ヨソ」と認識される (三宅, 1994; Lebra, 1976; Yamada, 1997)。自己と他人に対する意識はこれらの区別に従いながら日本人のコミュニケーションは行われるが、英語コミュニケーションではこうした区別は曖昧に捉えられる (三宅, 1994; Takekuro, 2006)。こうした日英語のコミュニケーションの違いは、会話ジョークにも関連し、日本語インタラクションでは、ジョークは疎遠の間柄、いわゆる「ソト」の関係ではあまり用いられないが、家族など「ウチ」の間柄では用いられることが指摘されている (Takekuro, 2006)。さらに、Oshima (2013)では、日本人による「面白い話」をウェブ上で募るプロジェクトを実施し、上記の点について同様に述べている。

これらの先行研究を踏まえると、日本語の会話ジョークに関わる談話分析は徐々に進められてきているものの、実際の自然会話を扱った上での会話ジョークの詳細を取り入れた研究はまだほとんどなされていない。

また、「会話ジョーク」 (conversational joke) は、主に英語による分析にもとづいている。Boxer and Cortés-Conde (1997)では、英語の会話ジョークについ

て、ジョーク、自虐、からかい、の3種類を会話ジョークに含めている。³ 一方、日本語の会話ジョークの種類は、まだ詳細に明らかにされていない。

本稿では上記の先行研究の研究成果を踏まえながら、さらに親しい間柄の自然会話に着目し、日本語の会話ジョークの詳細と、リスナーシップの役割との関係性を探る。

5. データ

上記で述べたとおり、親しい間柄の自然会話に焦点を置くために、本研究では日本人の3家族の日常会話180分をオーディオレコーダーで収録したものをデータとして用いる。データの詳細として、3家族共、岡山県に在住で、家族構成は、父、母、子供1~3人である。両親の年齢層は30~40代で、子供の年齢層は1~12歳の男女が含まれている。会話は、朝食、昼食、夕食いずれかによる家族の食卓の会話を、3日から5日間、各家族の母親にオーディオレコーダーで録音するよう依頼した。

6. 分析

上記の会話データから、3種類の会話ジョークが用いられている箇所 (ジョーク・からかい・自虐) を取り出し、その中で聞き手行動がどのように機能しているのかを検討する。

6.1 ジョーク

会話ジョークの1種類目にあたるジョークについて検討する。次の会話例では、父親が子供Kに対して、Kの好きなカルピスを野菜にかけるドレッシングにしてはどうかというジョークを投げかけている。

(1)

- 1 母「ああ、そうじゃ、野菜がある、野菜食べてない。野菜食べて」
- 2 K「ん〜…」
- 3 母「何が良い？かけるの」
- 4 父「カルピス？」⁴
- 5 K「ふふっふふふ」
- 6 母「カルピスは、いけん」
- 7 K「ふふふ」
- 8 父「ふっふっふっふ」
- 9 K「ごま」
- 10 父「ごまカルピス？ふふふ」
- 11 K「ごまごまカルピス……ゴマだれ…」
- 12 父「ん？ゴマどれ？」
- 13 K「ゴマだれ…んふふふふ、ゴマドレッシング」

² 会話ジョークとは、「愉快な笑いを引き起こすために会話参加者がユーモラスで皮肉的、そしてウィットに富んだものを即興的に創造する、衝動的な言語行動」 (Takekuro, 2006: 86) と定義される。

³ その他、英語会話におけるジョークの研究については、Norrick (1993), Chafe (2007) を参照されたい。

⁴ 灰色のハイライトは笑いが起こった箇所を示している。

K に野菜を食べるように促すために、母親がその野菜にかけるドレッシングを K に聞いている (3 行目). K が答える前に、父親が K の好きなカルピスを笑いながらジョークで投げかけ (4 行目), K もカルピスが好きなため笑いながら父親に応じている (5 行目). さらに父親は、「ごまドレッシング」を「ごまカルピス」に変えて投げかけ (10 行目), K も繰り返しながら笑いで応じている (11 行目). 子供の好きなものを知った上で父親のジョークに対して、聞き手の子供も笑いで応じやすく、2 人の共同的な会話が構築されている. さらに、これらのジョークのやりとりから子供は野菜を自主的に食べるようなスムーズな流れも生じていることが分かる.

次の例では、父親が息子 K にご飯を食べよう奨励している場面で、息子に向かって肯定的なジョークを何度も繰り返すことで、聞き手の息子からの笑いを引き出ししながら、息子の食事を進めている.

(2)

- 1 父「お父さんにも一口アーンさせてーや」
- 2 K「嫌」
- 3 父「お父さんコウタ好きなんじゃけんな」
- 4 K「んふふ…」
- 5 父「もう、お願い。お願い。だってこーちゃんが次おっきいアーンする顔見てえもん。ほら、アーンして」
- 6 K「んふふ…んふふふ…」
- 7 父「んーもう…」
- 8 K「ふふふふ、ふふふふ」
- 9 父「服の上零れるで」
- 10 K「ふふふ」
- 11 父「もうお父さんにアーンさせて」
- 12 母「ほら、あーんして、こーちゃん」
- 13 K「ふふふ」

父親は K に対する肯定的な愛情を表現することで K の口を開けさせようとし (1 行目), K は父親に笑いで応じはじめる (4 行目). さらに K の口を開けさせるために、父親は少し大げさに「アーンして」(口を大きく開ける) と繰り返しながら、K の大きな口の「アーン」が見たいと肯定的なジョークを盛り込んで K を奨励している (5 行目). これに対して K は笑いながら応じ (6~10 行目), 更なる父親の「アーン」と母親の繰り返して笑いで応じながら (13 行目), 会話の共同構築が行われている. 積極的で肯定的な父親のジョークを用いた働きかけを通して、聞き手の息子が笑いながら徐々に応じていく様子が分かり、円滑に目の前の子供の食事を進めることにつながっている.

6.2 からかい

ジョークに加えて、からかいも会話ジョークに含ま

れる. 次の会話例では、息子 S が母親にサラダを食べよう勧められているところで、父親は S をからかい始める.

(3)

- 1 母「サラダも食べてよ、サラダ」
- 2 S「なんで」
- 3 父「これこれこれこれこれこれ」
- 4 S「これこれこれ…これこれこれ」
- 5 母「何? それマネ?」
- 6 S「んふふふ…」
- 7 父「ふふふふ」
- 8 母「今日は久しぶりに母さん料理したなあ」
- 9 父「うん」

母親からサラダを食べることを促され (1 行目), あまり乗る気ではない S に対して (2 行目), 父親は「これこれ」と何度も繰り返して S をからかい、サラダを食べよう促す (3 行目). 聞き手の S も父親のからかいをそのまま繰り返して真似しながら同調している (4 行目). こうしたやりとりを通して、最終的にはお互いに笑いを共有しながら会話の共同構築を行っていることが分かる (6~7 行目). 息子は父親とのからかいに繰り返しや笑いで同乗する様子から、あまり気が乗らない食べ物を目の前にしながら肯定的な反応を示しているように考えられる.

6.3 自虐

会話ジョークの 3 種類目として自虐がある. 次の会話例では、両親と娘 B が先日開かれた運動会について話をしている場面で、母親が来年の運動会で、親子でリレーに呼ばれたらぜひ出たいという意気込みを述べ、自虐的なジョークを交えながら会話をしている場面である.

(4)

- 1 母「よし、(不明瞭) そうするわ. ……で、二人とも呼ばれんかったら笑えるよな、ははははっ」
- 2 B「はははははははは」
- 3 父「ふふふふふふ」
- 4 B「勝手な思い込みで、ひっ」
- 5 母「はくなや」
- 6 B「ふふふっふふ」
- 7 母「勝手に親が思い込みで言う、一年後の話をしよるけど」
- 8 父「お母さんいえば、それぐらいの意気込みでな」

母親は来年の運動会で娘と自分がリレーに呼ばれたら2人とも参加する意気込みを述べるが、当然リレーに呼ばれると想定していたにも関わらず呼ばれなかった場合についても、自虐的に想定しながら笑っている(1行目)。この母親の自虐的なジョークに対して、聞き手の父親と娘が笑いながら応じている(2~6行目)。さらに、母親は1年後についての意気込みを「思い込み」として自虐的に捉えながら笑っている(7行目)。この例から、母親の自虐的なジョークに対して、聞き手である家族メンバーもその自虐に肯定的に捉えて笑いながら応じ、会話の共同構築を行っていることが分かる。

6.4 積極的なリスナーシップ

上記で検討してきた会話例は、すべて話し手である両親側が主体的に会話ジョークを取り入れて子供やパートナーに働きかけ、それに対して聞き手側も積極的に笑いで応じている例を見てきた。次の会話例では、上記の例とは異なり、聞き手側から主体的に話し手の発言の中に笑いながらジョークを見いだし、会話の共同構築がなされた例を検討する。娘のCが理科の問題を家族に投げかけ(1行目)、家族が回答する(3~4行目)。家族の回答に対するCの発言に(5行目)、聞き手である母が主体的にジョークとして見いだし、積極的なリスナーシップを示している(6行目)。

(5)

- 1 C 「石灰水アンモニア水アルコールがあります。
石灰水アンモニア水アルコールがあります。
その中で個体が溶けているものはなんでしょう」
- 2 C 「石灰水…」
- 3 父 「石灰水じゃ」
- 4 母 「石灰水」
- 5 C 「正解！次」
- 6 母 「ははっ今ギャグねろた？」
- 7 C 「へ、なんで？」
-
- 14 C 「正解って言った。はははっ、母さん。うちが笑ってほしい時に笑わずにさ、うちがとんでもないとこで気付かんかった時に笑うから面白いわ」
- 15 B 「なにそれーっ?!」

母親はCが「正解」(5行目)を「石灰」と掛け合わせてギャグとして捉え(6行目)、笑って応じる。Cはこのような思惑はなかったのだが、母親が主体的に可笑しさを見いだしたことに笑いながらさらに応じている(14行目)。この例から、聞き手である母親が主体的

に話し手である娘の発言に可笑しさを見いだし、笑いながら会話の共同構築を創造していく様子が分かる。リスナーシップが高く示されることで、話し手との関係もこのようなやりとりを通して肯定的に進められると考えられる。

7. 英語教育への示唆

前述の通り、一般的に日本人は公共の場ではあまりジョークを言うことが少ないと頻繁に言われることを述べてきた。同様に、大学の英語の授業などでは、日本人教師と学習者の双方がジョークを交えたやりとりを行うことは実際あまり頻繁にみられることではない。しかしながら、本稿で検討したような、家族などの比較的親しいウチの関係では、会話ジョークが食卓の会話の中で主体的に用いられ、家族間の円滑な会話の共同構築に役割を果たしていることが分かる。つまり、日本人は私的な会話のやり取りの状況(ウチ)と、大学の授業等、公共の場でのやり取りの状況(ソト)を区別して捉えているが、このような区別の意識が、英語の授業内でもジョークのやりとりが比較的にみられないことを説明する可能性があり、この詳細については今後の課題としたい。

大学の授業で教員と学生間でジョークのやりとりが必要であるかどうかについては、授業の形態や専門によって意見は分かれるかもしれない。しかしながら、少なくとも英語の授業内では、ジョークのやりとりがあることは有益であると筆者は考える。授業中にジョークを扱うには、上記で議論を重ねてきたような、会話中に会話参加者間で即興的に創造される会話ジョークと英語教員が授業の題材として扱うジョークの二つの可能性がある。筆者は両者とも英語の講義については有益であると考える。前者の会話ジョークでは、教員が日本人の場合と英語母国語話者の場合ではジョークの頻度は異なり、英語母国語話者の方が多いと予想されるが、どちらの場合においても教師と学生間で会話ジョークのやりとりがあることで、学生が抱く英語学習に対する苦手意識や緊張が軽減され、リラックスして肯定的に英語学習に臨むことが可能であるためである。⁵ 特に近年日本の大学における英語授業では、教員の講義を聞きながら英語に関する知識や教養を身につけていくことだけではなく、英語による実践的な対話力を養うことにつながるような授業作りが求められている。教員と学生による会話ジョークのやりとりがあることは、学生が気負うことなく対話を重ねるこ

⁵ 授業中に会話ジョークのやりとりがあることと、学習の持つ英語学習に対する苦手意識や緊張の緩和についての関係性については、今後詳細な調査が必要とされる。

との楽しさも実感し、対話を重ねていくことに対する積極的な姿勢も身につけることに結びついていくと考えられる。

後者の授業の題材としてのジョークを扱うことも、筆者は大学の英語授業において有益であると考え。英語を話す文化ではジョークに親しみ、理解を示すことが円滑な人間関係作りに不可欠であると言われる。国際社会で日本人が生き抜き、活躍していくためにはジョークに対する理解や柔軟な対応も重要となるだろう。また、ジョークはそれぞれの文化的な要素も大きく関わるため、授業の題材としてジョークを扱うことで英語文化におけるジョークの多様性についても学生は理解を深めることが期待される。そのような取り組みを重ねることで、即興的に創造される会話ジョークにも、同時に柔軟に対応していくことにつながる可能性がある。

8. おわりに

本稿では、家族会話でみられる3種類の会話ジョークを扱いながら、会話ジョークとリスナーシップの関係を検討してきた。会話例として、話し手が積極的に聞き手に働きかけ、その働きかけに聞き手も主体的に笑いながら応じて会話の共同構築を行う例と、聞き手の方が主体的に話し手の発言の中にジョークを見だし、笑いながら話し手と会話の共同構築を行う例を示した。話し手の会話ジョークに対して聞き手が積極的に関わることを笑いで示すことで、家族の食卓での会話を円滑に運ばせることに役割を果たしていると同時に、間接的に子供に食事を進めることを肯定的に働きかけることが可能となり、こうした働きかけに聞き手側の子供も主体的に応じることで、会話と食を楽しむ様子が垣間みられる。最後に、英語教育への示唆として、英語授業における日本人学習者の会話ジョークに対する捉え方や会話ジョークを授業で扱う重要性について触れた。本稿は収集したデータの一部から取り上げた分析にもとづくため、今後さらに会話ジョークとリスナーシップの関係性の詳細をより深く探る必要がある。

文献

- [1] Takekuro, Makiko, Conversational jokes in Japanese and English. In Jessica Miller Davis (ed.), *Understanding humor in Japan*, Wayne State University Press, Detroit, Michigan, 85-98, 2006.
- [2] Oshima, Kimie, An examination for style of Japanese humor: Japan's funniest story project 2010-2011. *Intercultural Communication Studies* 22 (2), 91-109, 2013.
- [3] Goffman, Erving, *Forms of talk*. University of

Pennsylvania Press, Philadelphia, 1981.

[4] Gardner, Rod, *When listeners talk*, John Benjamins, Amsterdam, 2001.

[5] Tannen, Deborah, *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*, Cambridge University Press, Cambridge, 1989.

[6] Namba, Ayako, *Listenership in Japanese interaction: The contributions of laughter*, Doctoral dissertation, The University of Edinburgh, 2011.

[7] Laver, John and Sandy Hutchenson, Introduction, In John Laver and Sandy Hutchenson (eds.), *Communication in face to face interaction*, Penguin Books, Middlesex, 11-17, 1972.

[8] Jefferson, Gail, A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination, In George Psathas (ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*, Irvington, New York, 66-79, 1979.

[9] Glenn, Phillip, *Laughter in interaction*. Cambridge University Press, Cambridge, 2003.

[10] 三宅和子, 「日本人の言語行動パターン: ウチ・ソト・ヨソ意識」, 筑波大学留学生センター日本語教育論集 9, 29-39, 1994.

[11] Lebra, Takie, 1976, *Japanese patterns of behavior*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1976.

[12] Yamada, Haru, *Different games, different rules*, Oxford University Press, Oxford, 1997.

[13] Boxer, Diana and Florence Cortés-Conde, From bonding to biting: Conversational joking and identity display, *Journal of Pragmatics* 27: 275-294, 1997.

[14] Norrick, Neal, *Conversational joking: Humor in everyday talk*, Indiana University Press, Bloomington, 1993.

[15] Chafe, Wallace, *The importance of not being earnest*, John Benjamins, Amsterdam, 2007.